鈴旭小第698号令和5年3月17日

学校名 鈴鹿市立旭が丘小学校

校長 川北 浩司

## 校内研修実施報告書

### 1 研究主題

研究主題	地域を舞台に,自ら課題を見つけ,探求的に解決しようとする子の育成 ~各教科との連携を密にした生活科・総合的な学習の時間を通して~
教科·領域	生活科・総合的な学習の時間

### 2 研究の経過

過去2年間,職員が地域に出て,教材を見つけ,調べ,子どもたちに出会わせるよさや,面白さを感じた。それらを土台に今年度も地域を舞台とした生活科・総合的な学習の時間の研修を継続して行った。本校児童は素直で前向きで学習に意欲的な児童が多いが,課題として「周りとの関係が希薄で,自ら進んで相手を知ることに消極的」,「言葉によるコミュニケーション能力不足,伝え方が苦手」,「分かっていても行動に移すことができない」といった姿が見られる。

このような児童の実態から、身近な地域の「人」、「もの」、「こと」に学び、そこに暮らす人たちの思いや願いに触れ「心の成長」を促す機会を与え、主体的・探究的な学習を通して達成感を味合わせ、自尊感情を高めたいと考えた。さらに子どもたちが、自分たちの住む地域を知り、旭が丘の地域に愛着を持ってほしいという願いを職員が持ち研修を進めた。

また, 昨年度の反省として, 職員が強引に学習のレールを敷きすぎてしまうことがあり, 子どもたちと 教材との距離感が生まれてしまうということが挙がった。そこから, 今年度は, 子どもたちが探求的な 見方・考え方を働かせられるような単元構成に重点を置き, 研修を進めていくこととした。

### 1 学期

年度当初に全体研修会を行い、昨年度の成果と課題を確認し、研修の方向性について共通認識をはかった。子どもの実態やめざす子どもの姿を明確にし、生活科・総合的な学習の時間を核としたカリキュラムマネジメントを行い、年間指導計画を作成した。その後、各学年で、出会わせたい地域の人材を調査したり打ち合わせをしたりした。

探求的な学習のプロセスの中で効果的に学びのツールを活用できるように、ICT支援員を講師とし、 1人1台端末の活用方法に関する研修を数回に分けて行った。ミライシードの活用方法を教えていただいたり、ICTの活用について分からないことや悩みを質問したりした。

### 2 学期

夏季休業中に,「思考ツールを使った授業づくり」の研修を行った。探求的な学習を進めるときに,地域から見つけてきたことやインタビューで聞き取ったことをどのように思考するのかということについて話し合うことができた。「共通点を見つけるときはベン図」,「たくさんある事柄を分類したときは Y チャ

ート」など思考を具体化するパターンについて指導例を出し合うことができた。

全国学力・学習状況調査の結果を分析し、本校の課題である「引用して書くこと」の取り組みを、各学年でレポートにまとめ、交流をした。

全体提案授業を3回行い,実践から「思考ツールの最適な使い方を検討すること」,「探求的なプロセスを回していくために振り返りを充実させること」,「探求的な見方・考え方を働かせること」,「学習活動の目的や意図を明確にすること」等を学ぶことができた。

### 3 学期

年間指導計画を見直し,生活科・総合的な学習の時間と各教科との連携が密になっていたのかを検討した。地域から学んだことを自分たちに活かせているのかを振り返ったり,成長したことを発信したり交流したりした。

1学期に作成しためざす子どもの姿に立ち戻り,1年間の取組を振り返ることができた。取り組んできた単元計画はそれぞれのめざす子どもの姿に迫れていたのか話し合うことで,次年度への課題や改善策を考えることができた。

地域から発見した「人」「もの」「こと」を記録に残したり,取組の年間計画や年間指導計画,用いたワークシートをファイルに綴じたりすることで次年度への繋がりを作ることができた。

#### 3 成果と課題

各学年からの成果と課題は次の通りである。

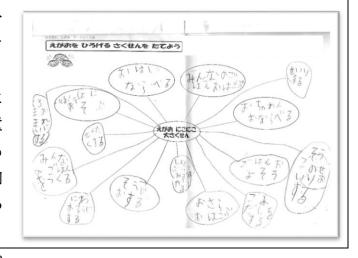
### 1年生

## ①体験を通して、「見たい」「聞きたい」「知りたい」という思いや願いをもつ子

第二次「えがおにこにこ大さくせんをしよう」では、家族のために自分ができることを、実際に家で挑戦した。その後、それぞれが家で挑戦したことを学級で伝え合い、発表の際はクロムブックで撮影してきた動画を見せた。自分がしたことと同じことであっても各家庭によってやり方が違ったり、自分は挑戦したことのないようなことを友達がしたりしているのを見て、子どもたちの活動への意欲はさらに高まった。子どもたちは友達が家で頑張る様子を具体的にイメージすることができ、友達の挑戦したことにとても興味をもって最後まで真剣に聞くことができた。

そして、友達の発表を聞いた後には「○○さんのここがすてき」カードに、友達の良いところを書いた。子どもたちは「○○さんはブロックを色別に片付けていてすごいね。」や「○○さんは妹のお世話をしてやさしいね。」などと書いていた。それぞれの家庭での友達の頑張りを尊重し合えただけでなく、妹

や弟の世話をする様子など学級では見られない一面も見ることができ、友達のことをさらに深く知るきっかけにもなった。そのような成果があった一方で、一年生の子にとっては友達の発表ごとにすてきなところを書くことの負担は大きかったようである。児童によっては内容がパターン化してしまうということも見られた。書くことに負担を感じやすい児童も前向きに取り組めるように書く分量をもう少し考慮する必要があった。

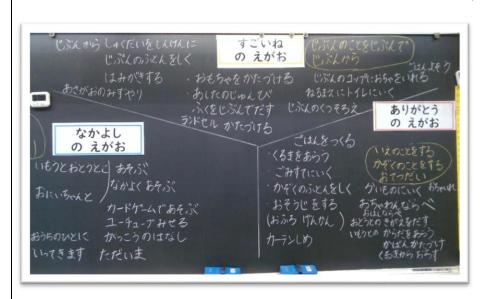


### ②自分なりの気づきや,感じたことを豊かに表現する子

### ☆思考ツール(マッピング・Y シートについて)

「えがおにこにこ大さくせん」の計画をするにあたって、第一次「一日の生活を振り返ろう」ではまず、自分の一日の生活の中でどんな時に家族は笑顔でいるのか、家族が笑顔になるために自分にはどんなことができそうか、ということを子どもたちは各自ワークシートにマッピングしていった。一日の生活を頭の中でたどりながら考えていくことで、自分ができることが想像しやすく、子どもたちはどんどん考えを膨らませていった。なかには、早くそれを実行に移したくてマッピングを自由帳に書き写し、「今日からこれを家でやってくる。」といっている子もいた。自分が家族のためにできることがたくさんあると実感したことで、「えがおにこにこ大さくせん」の計画に向けて前向きな気持ちを持たせることができたという点で、マッピングの活用は有効であったと思われる。

次に、子どもたちが考えた挑戦を Y シートを用いて3つの種類に分類していった。自分のことを自分でやることは「すごいねのえがお」、家族と仲良くすることは「なかよしのえがお」、家族のためにできることをすることは「ありがとうのえがお」につながるということを確認し、自分の挑戦が家族のどんな笑顔

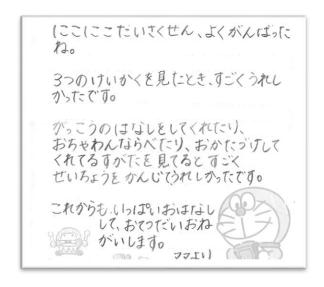


につながるかを考えていった。 そうすることで,自分が考えた 挑戦が家族にとってどんな喜び につながるのかを子どもたちの 中で整理することができた。そ してこの Y シートをもとに,「え がおにこにこ大さくせん」の一週 間では各自どの挑戦をするの か,それぞれの笑顔の中からひ とつずつ選び,計画を立ててい くことができた。

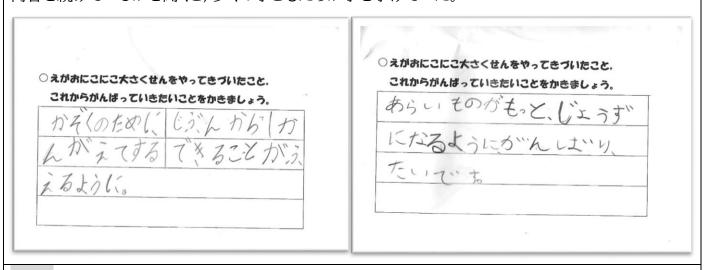
### ③活動したことを基に、自分の生活を豊かにしようと工夫をする子

第三次「ひろがったえがおをつなげよう」では、作戦のふりかえりとして、まず作戦を終えて家族からもらった動画や手紙を見た。動画か手紙かは各家庭で選んでもらうようにした。動画をもらった子どもたちは、実際に家族が喜んでいる姿や笑顔を見ることができ、自分の作戦が家族の笑顔につながったという実感を得ることができた。手紙をもらった子どもたちは「〇〇が宿題を自分からしてくれて気持ちがよかったよ。」「〇〇ができることがふえていって、成長したんだなと思ったよ。」といった思いのこもった言葉にとてもやりがいを感じていた。まとめとして「かぞくのえがおのひみつ」を考えた際にもそのような保護者からの言葉が子どもたちのヒントになり、子どもたち自身で、「かぞくのえがおのひみつとは『せいちょう』『じぶんからやること』である」と見つけることができた。

この単元は家庭の協力が前提として成り立つため、家庭の協力の度合いが子どもの学びに大きく影響した。家庭によって手紙の内容や分量に大きく差が出てしまったり、そもそも家庭での活動に取り組んでもらえなかったりしたところもあった。家庭間での取り組みの差を埋めるための手立てを考える必要があった。



また、単元のふりかえりとして「えがおにこにこ大さくせんをやって気づいたこと、これからがんばっていきたいこと」を書いた際には、「かぞくのためにじぶんからかんがえてする。できることがふえるように。」や「あらいものがもっとじょうずになるようにがんばりたいです。」などと書いており、自分を伸ばしこれからもつづけていこうとする子どもたちの意欲が表れていた。作戦の期間を終えたのちにも作戦の内容を続けているかを聞くと、多くの子どもたちが手を挙げていた。

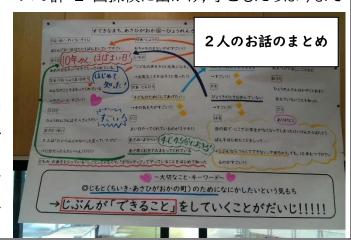


### 2年生

めざす児童の姿① 体験を通して、「見たい」、「聞きたい」、「知りたい」という思いや願いをもつ子

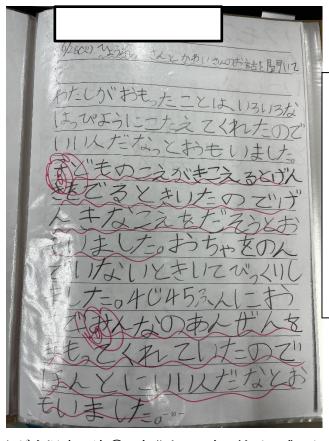
第一次では、各クラスで事前に旭が丘の町について知っていることや場所について話し合った後、町探検に出かけ旭が丘の町を歩いた。北コースと南コースの計 2 回探検に出かけ、子どもたちは今まで

住んでいた旭が丘にも知らない場所がたくさんあることに気がつくことができた。また,探検を通して場所だけではなく,様々な人(警察官・ボランティアさん・町の住人など)が共に生活していることに気がついた児童も多くいた。特に,旭が丘交番では警察官に質問をすることで,子どもたちの積極的に質問をする姿が見られた。また,公園で見かけたボランティアさんに気になることを質問に行ったグル

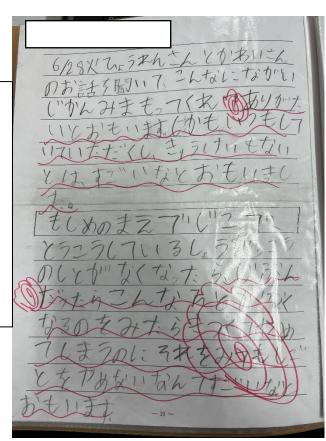


ープは, 町やそこに住む人のために見えないところで頑張ってくれている人がいるということに気がつくことができた。これらは, 体験を通してだからこそ得られた大きな成果であったように思う。

第二次では、物や場所から人に焦点を絞っていくために「旭が丘の町の人」について話し合った。子どもたちは町探検の経験から、いろいろな人に話を聞いてみたいという思いもあった。そのため、子どもたちから話を聞きたい人として挙がった、旭が丘校区で登下校の見守りボランティアをしている兵連さんと川井さんの2人を招いてインタビューを行った。インタビューの中でボランティアや旭が丘の町や子どもたちに対する思いや考えを話していただいた。子どもたちはとても興味深そうに話に聞き入っていた。最後に2人からは子どもたちに「人のために自分が『できること』をしていくことが大事」ということを伝えていただいた。同じ旭が丘の町に住む 2 人から生の声を聞けたことは子どもたちにとって非常に有意義な時間で貴重な体験となった。ただ、コロナ禍や時間上の都合もあり、出会い学習が 2 人で終わってしまったという課題が残った。子どもたちからは多くの話を聞きたい人が挙がっていたので、ボランティアのお2人以外にも直接話をする機会を設けることができれば、さらに目指す児童の姿に近づくことができたように考える。



| インタビュー時のふりかえりカード



めざす児童の姿② 自分なりの気づきや,感じたことを豊かに表現する子

豊かに表現する子の育成を目指して、生活カードを活動のたびに子ど もたちに書かせ、自分の気づきや考えを絵や文章で表現させた。活動ごと に生活カードを書く習慣をつけることで、子どもたちの表現力が 4 月に比 べ向上した。

### (思考ツールの有効性について)

小単元「みんなたいせつな子~これまでのわたし、これからのわたし~」 では、子どもたちの思考を整理するために Y チャートを活用した。Y チャートでは「おなかにいた時・生まれた時」、「1 歳の時」、「3~5歳の時」の 3



回の授業で思い出や家族の当時の気持ちや出来事を整理・分類し、共通点や違いを見つけるために使用した。Y チャートと付箋を活用し、当時の気持ちや思い出などの情報を文章で書き、子どもたち自身で考え、整理・分類した。作業を通して低学年の子どもたちであっても比較的簡単に思考を整理し、共通点や違いを見つけることができた。そして、整理・分析したことを一人ずつそれぞれが友達に伝える活動を行った。これらの活動を通して友達の生い立ちを知ったり、それぞれの家族の思いや自分の思いを伝えたり、共有することで本単元での狙いである自分や友だちそれぞれがみんな大切に育てられてきた「みんな大切な子」であるという意識を子どもたちに強く印象付けられたように思う。

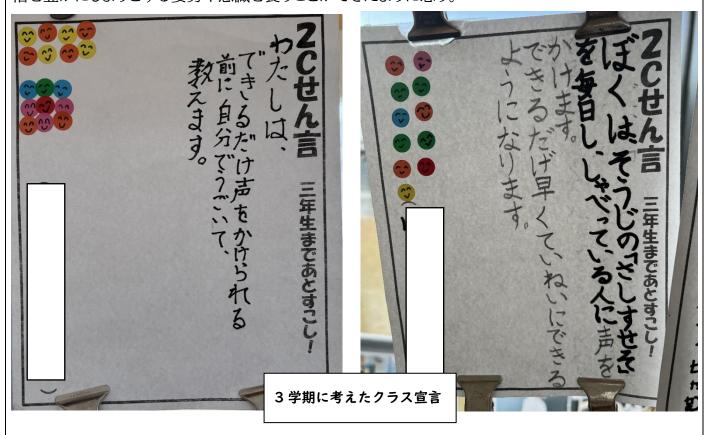


### めざす児童の姿③ 活動したことを基に、自分の生活を豊かにしようと工夫をする子

第三次では,兵連さんと川井さんから教えていただいた「地元(人)のために自分ができることをすることが大切」ということをもとにクラス宣言を作成した。このクラス宣言は,今までの学習で学んだ旭が丘の町で暮らす様々な人たちの思いに触れ,子どもたちひとり一人が旭が丘の町に住む一員として「クラス(人)のために自分ができること」を考え,みんなの



前で伝えるという活動である。子どもたちは「みんなが過ごしやすくするために、教室にごみが落ちていたら拾います。」や「友達が困っていたら優しく声をかけます。」などクラスや友達のために「自分ができること」をよく考えていた。しかし、この活動を実施したのが夏休み前であったことや 2 学期からは「みんな大切な子」の学習がはじまったこともあり、実際に子どもたちが考えた宣言を日常生活の中で実行しているかを確認することができず、ただ考えただけになってしまっていた子どももいたという課題が残った。そのため、学習の総まとめとして、再度 3 学期に「3 年生に向けてのクラス宣言」を考えた。この活動では前回の課題の改善のために子どもたちが自ら宣言を実行できたかどうかを毎日ふりかえりをし、できた場合は自分の宣言カードにシールを貼った。掲示してあるだけでなく、毎日自分の宣言カードを確認する機会を確保できるため、より自ら考えた宣言を日常生活の中で意識し、自分や周囲の生活を豊かにしようとする姿勢や意識を養うことができたように思う。



### 3年生

①自ら課題を発見し、解決しようと行動に移すことができていたか。

今回の「旭が丘再発見!」では、児童の主体性や行動力を大切にして学習を進めてきた。児童自らが疑問を持ったことをもとに調査を進め、課題意識を明確にさせた上で、さらに調査を繰り返してきた。校外学習に対する児童の関心意欲は当初から高く、教師が方向性をアドバイスしてやることで、探究心がさらに高まった。鈴鹿高専や警察署との連絡調整は、各担当の教師で行ったが、普段接することの少ない施設やそこで働く職員との交流で、児童の興味関心はさらに高まった。5つのコースで通年で学習してきたが、児童のわが町旭が丘に対する誇りや愛着は高まったと言える。

- ②情報の収集の仕方が分かり、調べたことを自分なりの方法で表現できていたか。
- 2 学期以降は興味関心を持った分野を 5 つのコースに分け、さらに調査探究を進めてきた。調査後の整理分析に「思考ツール」を使った事例を以下にまとめる。

警察署・店舗等コースでは、分析ツールのイメージマップを使って学んだことを整理させた。見学先

がちがう3つの場所を関連性のあるキーワードでつなぎ,各クラスで発表する際に内容の方向性を統一するため,このイメージマップを使用したが,校区探究のメモをイメージマップに表すことで,学んだことの何をどのように伝えたいか考えさせることができた。

公園コースでは,導入部分で分析ツールのくらげチャートを使い児童の興味関心を広げさせた。「くらげの足をふやそう!」と題し,児童たちは,公園について知りたいことを多く挙げていった。その興味関心を基に,「公園の遊具」「公園がつくられた目的」「公園の歴史」「公園にある建物」「公園に関わる人」の5つの観点で,グループごとに一枚の新聞を作り,まとめさせた。まとめる際の視点は,公園の現状を実際に見て感じたことや,地域の人との関わり・その思いに触れることで自らの公園の使い方を振り返ることを大切にさせてきた。

「思考ツール」にはそれぞれ特性があり、指導者がその特性を熟知して、適切なツールを提示して、 整理分析することが必要と感じる。

③地域とのかかわりの中で,互いのちがいを認め,支え合いながら仲間としてつながることができていたか。

最終的には、各コースで調査探究してきたことをクラスに持ち帰り、還流した上で、「旭が丘カルタ」を制作してまとめた。自らが探究してきたことを、国語や道徳の学習と関連させながら、カルタにまとめるわけだが、他教科とのつながりもあって、困り感なく進めることができる児童が多かった。6 年生を送る会では、制作したカルタを紹介して、多学年に伝える取り組みを入れた。また、50音でそろえた「旭が丘カルタ」を各クラス 1 セットずつ、計 5 セット作って、各クラスで体験した後、来年度の三年生への財産として残すことにした。



#### 4年生

①自ら課題を発見し、解決しようと行動に移すことができる子

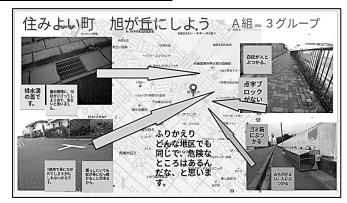
学習を進めていく中で、まずは自分の身近なところから、目の不自由な人にとって、どこが不自由なところになっているか、考えた。しかし、同じ立場に立っていないとイメージもしにくいので、学校の内外(学校周辺)でアイマスクと白杖の体験を行った。そこでは、自分たちが普段、何不自由なく過ごせている場所が、目の不自由な人にとっては、移動することが難しかったり、一人では不安になったりするとこ

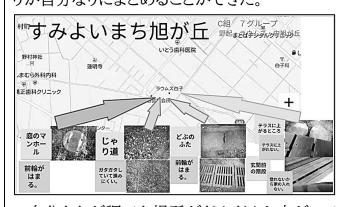
ろであることをたくさん気づくことができた。

そこで、その体験をもとに、自分たちの住んでいる地域の周辺が目の不自由な人にとって、過ごしにくいところになっていないか、探す活動をした。見つけたところを写真に残す活動をしたが、自分たちの身の回りには、目の不自由な人たちが安全で安心して過ごせるところが少ないことにどの子も気づくことができた。これは、足の不自由な人の体験をし、車いすを使うときに使いにくい場所を探した時も同様であった。どの人も住みやすい町にするには、どんなことが必要か、また自分たちにできることはどんなことなのかをか考えていく展望ができたと言える。そこからさらに発展し、学級の中では、同じ地区でよく見かける難聴の人と関わりたいという思いから、手話を覚えて自分たちから難聴の人と関わり、交流することができた児童がいたことは、大いなる成果であった。

### ②情報の収集の仕方がわかり、調べたことを自分なりの方法で表現できる子

目や足の不自由な人たちが困るであろう場所を 撮ってきた写真には撮影者の思いが詰まっている ので、その思いを簡単に学級で交流した。そのあ と、同じ地域の子同士で集まり、写真の場所を示し あうことで、共感するところや新たに気づいたこと などを交流し合った。それらを、Jamboard で表し た。Jamboard の真ん中には、地域の地図を示 し、写真、付箋、矢印を使って子どもたち一人ひと りが自分なりにまとめることができた。





同じ地域のグループの子同士で地図を共有しているので、どこがどの写真の場所かすぐにわかり、 意欲的に活動でき、課題を見出す作業もスムーズに終えることができた。さらに地域ごとに学級内で発表することで、違う地域の子たちと共通する課題が出てきたり、その地域特有の課題が出てきたりした。

自分たちが調べた場所がだんだんと広がっていくことによって、今、自分たちが住んでいる町、市、県、国共通の課題にも気づくはずである。しかし、個人では施設や設備的なものに目がいきがちな視点をクラゲチャートで表すことで、人と人との関わりについても大切であると気づく子がたくさん出てきた。そしてそれらをまたグループで交流することで、様々な手立てが見えてきて、学級内の6つのグルー

プがいろいろな視点で仲間分けすることができたのはよかった。

6つのグループのJamboardを小さいカードにし、それを手にしてワークシート上で置いたり並べたりして、仲間分けを行った。2つの仲間に分けたり、3つや4つの仲間に分けたりして、その仲間の分類の違いを考えたことは自分の思いがはっきりとし、どうしたら住みよい町になるのかということが誰にでもわかる図になっていた。



その仲間分けの中には「人がやること」というものがたくさんあり、それらから自分にもできることがイメージできやすくなり、作業をしていても手が止まる子が少なかったのはよかった。

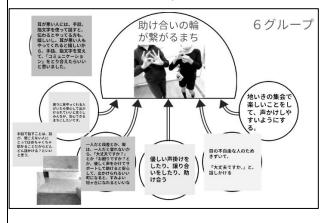
### ③思考ツールについて

クラゲチャートを使って、子どもたちの思考を整理することができた。体が不自由な人たちにとって住みよい町になるためにはどんなことが必要かを個々に考えさせた。そして、グループ内で個々に考えたものから共通するものや課題になるもの、大切にしていきたいものを今後の展望としてまとめてもらった。



思考ツールには、それそれどのように活用す

るのかが決められており、ぴったりではないものだと、子どもたちの自由な発想をなくしてしまうかもしれないので気をつける必要がある。本来のクラゲチャートは、頭の部分に主張や意見となる表現や記述を書くのであるが、今回はぼんやりとした「住みよい町になる条件」として、まず個々の考えを足の先にある〇の部分に書いた。それらから共通するものやより具体的な住みよい条件として頭の部分を考えたので、クラゲチャートの活用の仕方としては正規の運用の仕方ではないが、その頭の部分が各グループで異なることにより、仲間分けができる結果となったので、よかったと思う。



課題ありきで学習を進めていくのではなく、子どもたち自らが課題に気づき、今後の学習を見通していく上でも今回のクラゲチャートは有効であったと言える。

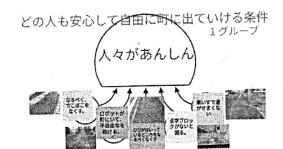
また,仲間分けの大半を占めたものとして,「施設設備的なものを早く設置する」ということと「周りの人が声をかけて手助けをする」という2つが挙げられていた。ワークシートに書いた気づいたことやふりかえりでも出てきていたが,「声をかけることは,自分たちにも

できる」ということに気づけていた。6つのクラゲチャートのカードを手に取り、頭のところのテーマや足の部分の意見を読んで、並べて仲間分けをすることでわかってきたことがあった。総合的な学習の時間では、いつもワークシートや振り返りシートを使っているが、自分の意見や感想を書けない子がいる。しかし、今回のワークシートの振り返りでは、全員が課題を見つけ、その課題に対しての自分なりの意見を書くことができていた。授業の学習過程に沿った自分の思考過程が自分で振り返ることができれば、ワークシートの作業も苦痛でなくなるはずである。本時で生かされたことをもとに、今後の教材研究を進めていきたい。

## 人がテーマ

# 安心がテーマ





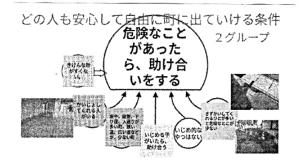




## まちの上夫がテーマ

## 且カけ合いがテーマ





(のこのべんう気をして自分にできるとしたいです。りゆうはごみをすてない、こまえいる えかいたら目かけるということをしたいです。りゆうはごみをすてたら、目の不自由 な人などかっまずいてしますからび、も)一々は、見がけ合いをして、あされ が丘はすみよい田丁になると思いたとうです。 ヨじるいんにできることはことかけや、月のけ合いだと思い、します。 とうしてかというとしれたちはまたごうとはたいから何を作ったりらくしたり するとはてごさまいから、さけんなどころでごえがけからかけ合いで、 事となけいです。 <u>④地域との関わりの中でお互いのちがいを認め、支えあいながら仲間としてつながることができる子</u> サウンドテーブルテニス選手の黒田さんをお招きして、目が見えていた方が病気で失明してからどの ような生活をしていたかのお話を聞いた。見えなくなった当初は困っていたが、便利なものや人の助け で生活がこまらなくなったということを教えていただいた。



そして、目の見える人と、見 えない人がつながるSSピンポ ンという競技を教えていただ いた。ピンポン玉の中に金属 球が入っていて、テーブルの 上を転がる時に音がするの で、その音をたよりにラケット で玉を打っていく競技である。

アイマスクをした先生や子どもたちも黒田さんと対戦したが, 黒田さんが目が見えているように球を打てていて, 得点できるのが子どもたちには驚きだったようである。

授業に一緒に参加してもらった黒田さんのお友達の中野さんからもお話を聞いた。中野さんは黒田さんの目が見えなくなってからの友人ということであった。中野さんは,友達を長く続ける秘訣は「何でも言いあうこと」と言っていた。黒田さんが対外的な接触を避けていた時期に「出ていったらええやん」と声をかけて,一緒にたくさんお出かけをしたそうである。「行きたいから行く。」「聞きたいから行く。」「聞きたいから行く。」目が不自由だからといって,気を遣うのではなく,同じことをしていて,困ったら助けるというスタンスでいることを教えてもらった。中野さんは,黒田さんのお話の最中に小物を使う時や何かを見せる時に,さりげなくその話のお手伝いをしていた。それは「してあげる」という感覚ではなく,友達として自然にしているということだった。中野さんが黒田さんから教えてもらうことも多いそうである。中野さんの話の中からは,違いを認めることやお互いが支えあっているという部分がたくさん聞こえてきた。「何でも言いあうこと」ができる関係,まさに理想の友達関係を知ることができ,子どもたちも刺激をもらったようであった。

## 【子どもの声】

- ・黒田さんと中野さんが 17 年もずっと友だちと聞いて,目が見えていなくてもずっと友だちということがとてもすてきです。目の不自由な人に会ったり,見かけたりすると,中野さんのようにやさしくたいおうして目の不自由な人にも喜んでもらいたいなと思いました。ぼくが歩いているときに点字ブロックの上になにかおいてあったりしたら,どかして目の不自由な人をこまらせないようにします。
- ・目の不自由な人たちは全部こまっているわけじゃないから、ちゃんと聞いてからはんだんしようと思いました。だれか一人でもたすけてもらいたいと思っていると思うから、見つけたらすぐにたすけたいなと思いました。わたしが中野さんの立場だったら、さいしょはどう関わればいいのかわからないけど、ふつうに接すればいいのかなと思いました。
- ・目が見えなくなることは身近にいると感じます。黒田さんが言っていたように声をかけるって本当に大切なんだとあらためて思いました。自分は声をかけられる人になりたいです。何でもチャレンジすることは大切なんだと思います。

### 5年生

①自ら課題を発見し、見通しをもって解決することができる子

## 成果

1学期には、身近な給食や自分の家の夕食調べから課題を発見し、その課題について調べ・表現することができた。成果として、子どもたちに身近な給食や夕食を取り上げたことで、学習を自分事として捉えている姿が見られた。家庭の夕食調べでは、オクリンクを用いて自分の家の夕食のメニューを写真で撮影し、それらを交流した。普段目にしない友だちの夕食に関心を示しているようだった。そして、身近な給食や夕食から世界との文化の繋がりを感じ、「世界には他にどんな文化があるのだろう。」という課題を主体的に発見することができた。





2学期には、「1学期にまとめたことを体験しよう」というめあてを立て、社会見学でリトルワールドに足を運んだ。「調べたことが本当にあった。」や「他にもこんなものがあるんだ。」とたくさん驚く姿が見られた。その後、地域に目を向け、「調べたことや体験したことは身近にはあるのだろうか。」と学習課題を立てることができた。1学期と同様にオクリンクを用いて鈴鹿市や旭が丘にある外国の文化に繋がりのあるものを写真で撮影し、それらを交流した。「こんなものがありました。」や「結構あったことにびっくりしました。」と自分たちが暮らす町に改めて驚いている様子だった。「地域を歩いたことがない。」と答える5年生の児童も多い中で、今回の活動で地域に足を運ぶことができたことも成果であると言える。他にも、調べ学習から「このお店ってだれがやっているんだろう。」や「どんな目的であるんだろう。」と主体的に課題を発見する姿も見られた。

自ら課題を発見する手立てとして、身近な教材や体験活動を取り入れることを意識して取り組むことができた。取組の成果として、教材と自分との距離が近くなり、主体的に学習に取り組める児童が多くみられた。また、地域を題材にしたことで、普段よく目にする自分たちの町だからこそ課題にたくさん気づくことができた。





## 課題

探究的なプロセスを進めていくうえで、子どもたちが自ら発見した学習課題を設定していきたい。しかし、教師が意図する学習課題にどのように気付かせるのか、どのように引き出していくのかという難しさを感じた。また、子どもたちがどこに興味を示し、どこに疑問を抱いているのかを見取ることの難し

さも同様に感じた。

そこで、2学期に行った全体研修会では「ふりかえりの重要性」について助言をいただいた。ふりかえりとは、感想文ではなく学びの足跡であること。これらを教師側が意識することでふりかえりの質が高まり、子どもたちの言葉から学習課題を設定できることを教えていただいた。また、視点を持ってふりかえりを書くことで、次の学習への見通しを持つことができるように感じた。実際、2学期以降のふりかえりでは、学習を通して感じた疑問や自分の考えを表現する児童が増えたように思う。探究的なプロセスを進めるためには、指導計画を立てる段階でどのような視点でふりかえりを書くのかを明確にしておくようにしていきたい。

そして,ふりかえりの視点を身に着けるためには総合的な学習の時間だけの取組では不十分であると感じた。国語や算数などすべての教科において学習の最後にはふりかえりを設定することが必要だと感じた。

### ②情報を生かし、自分の考えを組み立て、効果的な方法で表現できる子

### 成果

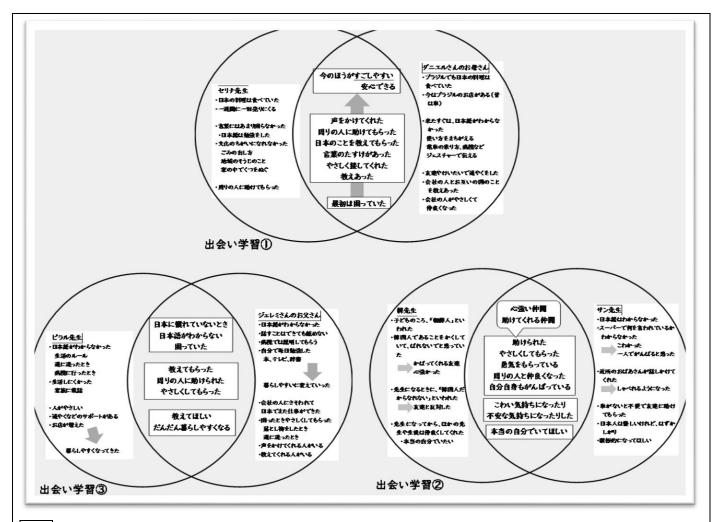
1学期にオクリンクを用いて調べたことを発表した。オクリンクの良さとして、①インターネットから写真や統計資料を引用しやすいこと、②一人ひとりが作成したページを班の全員で共有できること、③操作が容易なことが挙げられる。子どもたちも抵抗感なく意欲的に取り組めていた。また、写真や資料といった実物提示をすることができるので、言葉のみの発表より効果的に発表することができた。

2学期には外国に繋がりのある人たちへのインタビュー活動をすることができた。そこで知ることができた情報や気づいたことを生かし,自分の考えを組み立てる手立てとして思考ツール(ベン図)を用いた。ベン図は算数の「8偶数と奇数,倍数と約数」の単元で既習の思考ツールである。そのため,5年生の児童としては活用しやすいのではと考えた。

同じ国に繋がりのある2名ずつにインタビューをすることができた。ベン図を用いることで違いや共通点を明確に整理・分



析することができた。また,国ごとに作成した3枚のベン図を並べて分析することで,すべての人に共通している「その人の努力」と「人と人の助け合い」の2点を多くの児童に気づかせることができた。図に整理されたことにより,知ることができた情報や気づいたことが整理され分析しやすくなったのが成果であると言える。また,総合的な学習の時間だけではなく,社会や算数でも違いや共通点を見つける場面では意図的にベン図を活用するようにした。自主学習でも,違いや共通点を見つけることをめあてにした児童は自主的にベン図を使っており,ベン図の利便性を児童自身が感じることができていたように思う。



### 課題

2学期、インタビュー活動で知ることができた情報や気づいたことをベン図に整理・分析する活動を3回確保した。3回とも学級の全員で知ることができた情報や気づいたことを出し合いながら1枚のベン図にまとめていった。しかし、1度も自分の気づいたことを表現することのなかった児童もいた。ベン図は自分の思考を整理して分析しやすくするためのものであり、表現しない児童を生み出してしまったことで教材と自分との距離が遠くなってしまった。そして、子どもたちの主体性が損なわれてしまったのではないかと考えられる。そのため、個人でベン図に整理・分析する活動を取り入れることができなかったことが課題として言える。

また、1学期と2学期において「知る」ということを重点取組として学習を進めてきた。5年生の特徴として、「地域に外国に繋がりのある人がいるのか分からない。」や「5年生の外国籍児童の国籍がどこの国か分からない。」と人に無関心で理解が浅いことが挙げられる。そのため、調べ学習やインタビュー活動といった国の文化や外国に繋がりある人たちの想いを知ることに授業時数を確保した。しかし、インプットする時間が多かった一方で、インプットしたことをアウトプットする時間を確保することが難しかった。1学期に発表活動は行ったが、調べた情報をただ羅列し、説明するだけの活動になってしまった。そこから自分の考えを持つという活動に時間を取ることができなかった。理由としては、行事や日々の授業により、総合的な学習の時間の確保が十分にできなかったことが挙げられる。正しく「知る」という点について、子どもたちの世界が広がったことは大きな成果だと言える。しかし、自分の思いを持ったり、それらを言葉や行動に表現したりすることができなかったことは反対に大きな課題だと言える。

### ③地域との関わりの中で、自分を見つめ、自分のできることを実践する子

## 成果

ベン図を用いて整理・分析した結果,だれもが暮らしやすい町にするためには「その人の努力」と「人と人の助け合い」の2点が大切だということに気づくことができた。

外国に繋がりのある人たちは、日本に来て日本語が分からず困ったとき、自分で辞書や日本のテレビを見て学習したことを例に、まず自分で努力したということを話していただいた。そして、それでも困ったときには身近な人が助けてくれたこと、助けがないと日本ではない国の国籍だからといって不当な扱いを受けてしまうことを話していただいたときにはとても驚いている様子だった。さらに、日本人は消極的な国民性で、助けてくれた人はごく一部だということを教えていただいた。最後には「私たちのように困っている人は今もいます。だから積極的に自分から声をかけてください。」という想いも聞かせていただいた。その話を聞いた子どもたちの中には、「もし、そんな風に困っている人がいたら助けたい。」や「自分から積極的に声をかけたい。」と人のために行動しようという気持ちを言葉で表現する人もいた。その一方で、「話しかけても言葉が分からなかったらどうしよう。」や「緊張して声をかけることができないと思います。」と消極的に考える人もいた。だが、どちらも主体的に学習を捉え、これまでの自分の生き方を見つめているからこそ出された考えのように感じた。自分たちに身近な人の努力や困り感

インタビュー活動後には、「日本語が苦手な友だちが配りものを配りやすくするために、宿題の名前欄にふりがなを書いた児童」や「旅行先で日本語に困っている外国の人に気づくことができた児童」、「人のためにという気持ちで、6年生を送る会やあいさつ運動に意欲的に取り組もうとする児童」など、自分のできることを実践しようとする児童の姿がたくさん見られた。

を感じたからこそ,自分の生き方を見つめなおすことができた。



## 課題

自分の生き方を見つめなおすことはできていたように思う。しかし、対象が外国に繋がりのある人に限定されてしまったことが課題として言える。外国に繋がりのある人への自分の行動や言動を見直すことはできた。結果として、外国に繋がりのある児童がいる学級では、成果で述べたような姿が見られた。その一方で、身近に外国に繋がりのある児童がいない学級では、そういった姿はほとんど見られなかった。理由として、「困っている人とは外国の人だ。」という考えが子どもたちに定着してしまったのではないかと考えられる。そのため、自分の身近にいる友だちの困り感を見つけることができなかった。

「地域との関わりの中で、自分を見つめ、自分のできることを実践する子」という目指すこどもの姿に 迫るためには、実生活への結びつきが弱くなってしまったことが課題として挙げられる。実生活との結 びつきを強めるために、地域との関わりで知ったことをもとにして自分の考えを持つ活動を充実させて いきたい。「今、自分はどんな状況に置かれているのか。」や「自分の身の回りに困っている人はいない か。」といった実生活につなげるための問いかけを増やしていきたいと感じた。3学期には低学年に向 けてのあいさつ運動を行った。インタビュー活動で感じた想いをもとに、少しでも人の助けになろうと一 生懸命工夫しながらあいさつする姿が見られた。あいさつ運動の取組から、子どもたちは自分が考え たことをもっと実践していきたいという気持ちを秘めているのではないかと可能性を感じることができ た。 また,授業時間の確保とアウトプットの活動の充実を達成するための手立てとして,国語科とのカリキュラム・マネジメントの可能性を感じることができた。3学期の「提案しよう,言葉とわたしたち」という単元は,学校生活や日常生活をより良くするために提案し合うという学習内容である。総合的な学習の時間で2学期に学習したことをもとに実生活に目を向けて考えることのできる良い単元である。この単元と繋げることの利点として,授業時間の確保とアウトプットの活動の充実が考えられる。カリキュラム・マネジメントをすることで課題である授業時間の確保を解消することができ、また,主に国語科と関連付けることで,自分の思いを表現する言語活動を充実することができる。学期ごとに年間指導計画の見直しを丁寧に行い,積極的にカリキュラム・マネジメントを実践していきたい。

### 6年生

【考察】○・・・よかった点 ●・・・改善が必要な点

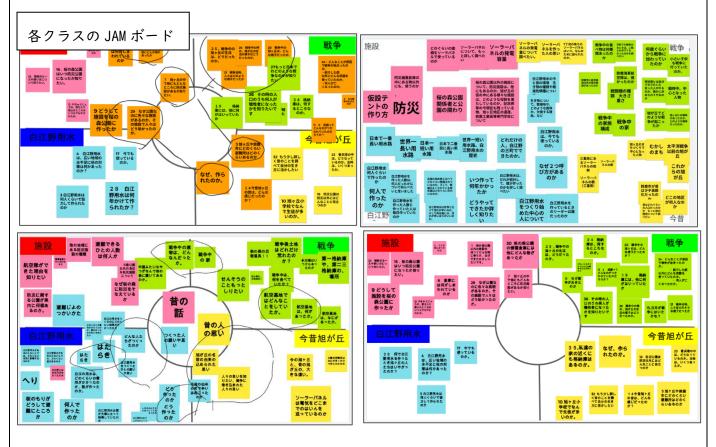
- ①自ら課題を発見し,見通しをもって解決することができる子
- 1 学期には,「公共施設」「戦争」「白江野用水」「今昔旭が丘」の4つのグループを編成した。各クラスで編成された,同じ探究課題のグループが1つの教室に集まり,それぞれの疑問を解決するために調べ活動を行い,スライドにまとめた。
  - ○情報を収集するためには、インターネット・本・現地に現物を観察しにいく・人に話を聞くなどの方法とその良さと課題を学ぶことができた。
  - ○調べてきた情報を整理・分析する際には、多様な情報の中から課題の解決にとってその情報が必要かどうか、信頼できる情報かどうかを判断し、取捨選択し、情報を整理する必要性を実感することができた。
  - ○集めてきた複数の情報を組み合わせて,分かることはないかという視点について学ぶことができた。
  - ○数字の情報ではわかりにくい場合は、グラフで表現する良さを学ぶことができた。
  - ○夏休みには,1 学期に学んだことで疑問に残った,またはさらに調べてみたい戦争に関することに ついて調べ学習をすることができた。
  - ●現地に行って調べ、協働でまとめをしていくのに時間がかかるので、4 月に入ってすぐに学習に取りかかるべきだった。
  - ●白江野用水については、4 年生でも調べをしているので、同じ課題を何回も調べをしていることになった。テーマを「平和学習」という観点から、いくつかの小テーマに分けても良かった。

小テーマ例:戦時中の人々の暮らし・鈴鹿の軍事施設・鈴鹿市の成り立ち・出兵していった人の思い等

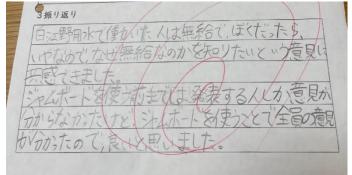
児童が作成したスライド

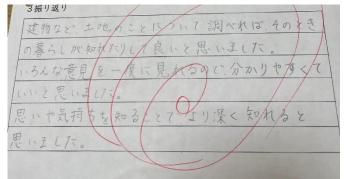


- ②情報を生かし,自分の考えを組み立て,効果的な方法で表現できる子(思考ツール) 調査した結果について,クロムブックのスライドのソフトを使用して,まとめさせた。今回の伝える相手は,自分のクラスの他の調べをしていたグループであった。
  - ○各班で交流する際に、スライドを作成した。相手にしっかり伝わるように順番、文字の大きさや色、 話す中での資料を提示するタイミング等の工夫することで、聞き手を意識した表現力が向上した。
  - ○JAM ボードを使うことで、学級のすべての友達の考えを一度に知ることができた。発表が苦手な児童にとっては、発信しやすくなり、全体で思考を共有しやすいという利点があった。
  - ○JAM ボード上で,座標軸の思考ツールを使うことで,考えを整理して一度に見ることができるので,共通点を見つけやすくなった。
  - ○フィッシュボーンの思考ツールを,人権フォーラムに向けての学習でも活用させることで,児童は, 意見を整理する際に,思考ツールの良さを実感することができていた。
  - ●発表時に、相手意識が向上した児童もいるが、多くは一方的に決められたことを話す児童が多かった。
  - ●座標軸の思考ツールを改良して,真ん中に丸を作り,共通点をそこで整理させたかったが,児童の意見数が多く,○の広さを大きくとれず,活用しにくかった。
  - ●JAM ボード上で児童が対話しながら分類していくには,一つのシートを使うのではなく,各班で話し,分類するような場作りをすると,児童一人ひとりの思いが表現できる機会が保障され,より探究的になる。
  - ●JAM ボード上の友達の考えを分類していく際に、共通点を見つける力に課題があった。キーワードでの共通点は見つけられるが、内容を踏まえた共通点を見つけられない。

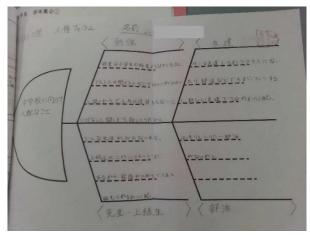


### 児童の感想





### フィッシュボーン(人権フォーラム関連学習での活用)





### ③地域との関わりの中で、自分を見つめ、自分のできることを実践する子

1・2学期には、旭が丘の歴史を自分たちで調べる活動を通して、旭が丘の地域のことを知り、そこで生きてきた「ひと」、作られてきた「もの」や「こと」と出会い、込められてきた「思い」を感じとろうと、これからを生きる自分たちはどのように生きていけばよいか、生きていくべきかを考え、行動していける児童の育成を目指して取り組んできた。しかし、「思い」については直接話を聞かないと分からないという子どもたちの意見があり、戦争を体験された方に話を聞こうということになった。そこで、夢工房の事業を活用して、戦前生まれの加藤二三子さんをゲストティーチャーとして招くことになった。

話を聞く前には、戦時下の鈴鹿市についてもっと知ってから話を聞くほうがより理解が進むと考え、「戦時中、鈴鹿市にあった主な軍事施設」「算所の空襲について・鈴鹿海軍工廠に勤労動員に関する談話」について学んだ。

そして、加藤さんを招いた学習では、戦時下の生活の様子や当時の思いを聞き、「平和のために、小学生の自分でもできることは何があるのか。」「身近なことからでも、できることをやっていきたい。」などの思いが児童の意見から出された。

- ○現存する軍事施設跡を動画で見ることができ,自分が普段生活している町中にも,戦争の跡が残っていることを学べた。
- ○実際に話を聞くことにより、平和であることに対して感謝する気持ちを持つことができた。
- ○日本に戦争がない現在の状況は,人々の努力や工夫によって支えられ,現在につながっていることに気づくことができた。

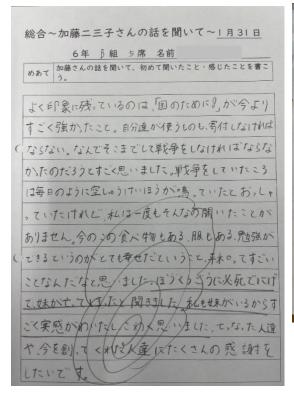
- ○平和に対する考え方、「生きる」ということについて改めて考える機会となり、児童にとってこれから自分がどのように行動していくのかについて、真剣に考える学習となった。
- ●平和な世の中にしていくために、自分は何ができるのか考えるのが難しい児童もいた。
- ●自分が行動していきたいと考えた行動が、必ずしも普段の生活での行動につながっていない児童 もいるので、考えを実行に移していけるように、適時指導が必要である。

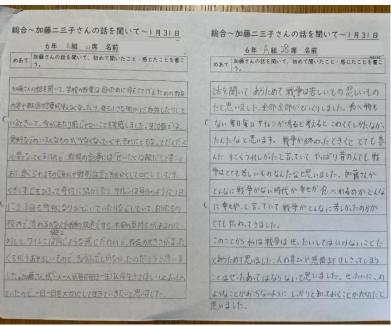
### 加藤二三子さんを招いての授業の様子





### 児童の感想





### ④カリキュラムについて

今年度は、「1 学期 地域調べ→2 学期 平和学習調べ→3学期 平和学習まとめ」というような流れで学習を行った。今年度の反省を生かし、来年度も平和学習を行うのならば、「1 学期 平和学習→2 学期 修学旅行の調べ・人権フォーラムの取組→3学期 6年間の生活・総合のまとめ」としてはどうかと考えた。

理由としては、3点ある。

1点目は、社会の教科書では、公民を1学期に学習することになっており、太平洋戦争を学習するのは3学期になってからとなる。戦争を社会科で学ぶ時期と総合学習での学習を同時期に行うのは困難であるため、一学期から平和学習に取り組んだら良いと考えた。

2 点目は,1 学期の地域調べは,今までも地域のことを下学年で調べてきており,調べる内容が重複するグループもあったためである。

3点目は、2 学期は、修学旅行の取組に加え、人権フォーラムに向けた取り組みにどうしても時間が割かれ、年間通した一つのテーマで総合を進めるのは、時間配分的に困難であると感じたためである。 これらの理由から、今年度実施したカリキュラムの見直しをすべきであると考えた。

また、学習テーマについて児童にアンケートをとったところ、将来の職業調べなどのキャリア教育に興味を抱く児童は多数いた。下学年で行われにくい内容であるので、6年生で実施する価値はあるかと考える。

以上のように、地域を舞台にして、教材として活用することに関しては成果を出せたように思う。すべて の学年に共通して言えることは、地域を舞台にしたことで子どもたちと教材の距離が近くなったことであ る。そのため、子どもたちが主体的に学習に向かうことができた。そして、地域に住む様々な人と出会い、 その人の経験や思いを聞くことで、自分の生き方を見直すきっかけにすることができた。

昨年度の課題であった「探究的な見方・考え方」に対しても学年ごとに手立てを講じることができた。子 どもたちが発見した疑問や気づきを見落とさないように、話し合う姿から見取ったり、ふりかえりから言葉 を拾い集めたりできるように取り組んだ。自ら見つけた課題に対して学習を進めることができたため、意 欲的に取り組む児童の姿も見られるようになってきた。

また、今年度は思考ツールを研修に取り入れた。すべての学年において思考ツールを活用することの有用性を感じることができた。次年度は総合的な学習の時間だけではなく、他教科においても活用できるようにしていきたい。

事後検討会では、課題として「どんな視点でふりかえりを書かせるか。」ということが挙がった。ふりかえりとは学習の足跡であり、決して感想文ではないということを教えていただいた。本校の児童はふりかえりを感想文と捉えている児童が多くみられるように思う。「ふりかえりに何を書かせたいか。」,「どんなことを書いてもらいたいか。」ということを明確にすることで、新たな学習課題を発見することに繋がるのではないかと感じた。そのため、ふりかえりの視点を明確にし、子どもたちがより探求的な見方・考え方を働かせることができる単元構想・指導計画を立てられるように研修を推進していきたい。